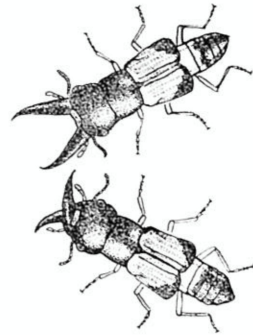


COLEOPTERISTS' NEWS

甲虫ニュース

No. 39

(Oct. 1977)



日本産ミズスマシ科概説 (3)

佐藤正孝

Tribe Gyrinini ミズスマシ族

3属からなっているが、日本には *Gyrinus* 属だけが知られている。他の *Aulonogyrus* 属は約50種が主としてエチオピア区に、一部がインドやオーストラリアに分布しており、*Metagyrynus* 属は3種だけを含み、インドから中国にかけて分布している。

Genus *Gyrinus* GEOFFROY, 1762 ミズスマシ属

この属は全世界に分布し約190種が知られているが、3亜属に分けられる。日本産種はすべて *Gyrinus* s. str. 亜属に含まれる。他の2亜属とは上翅の点刻列が後方だけに限られず全背面に認められ、小楯板に隆起線を欠くなどの特徴によって区別できる。他の2亜属は僅かな種を含み、*Gyrinulus* 亜属は2種が全北区に分布し、*Neogyrynus* 亜属の5種は南アメリカに分布している。

日本産の種をつぎの検索によって区別してみたが、どの種も黒くて光沢があり、おたがいによく似ていて区別がむづかしい。この検索もうまく使えるか自信がないが、♂交尾器を検することによってそれぞれの種を区別できる。これまでに、検索や特徴の中で前胸側片、上翅側片及び体下面の色彩が赤褐色になる点が区別点にあげられ、とくに *G. curtus* を他の種から識別するのに用いられてきた。しかし、これらの特徴は成熟の度合によってかなり変化があり適切でないようである。

1(2) 体長はほぼ6mm以上。背面は光沢はあるがややにぶい……………*japonicus* SHARP

2(1) 体長はほぼ6mm以下。背面は光沢が強い。

3(4) 腹部末端節の微細印刻は、はっきりと認め

られる……………*reticulatus* BRINCK

4(3) 腹部末端節の微細印刻は、かすかに認められるにすぎない。

5(8) 体長は体幅の1.9倍以上ある。腹部2・3節の基部は後基節に沿って強くくぼんでいる。

6(7) 上翅側方の点刻列は普通で、溝状とならない……………*gestroi* RÉGIMBART

7(6) 上翅側方の点刻列は強く、やや溝状を呈する……………*ryukyuensis* M. SATO

8(5) 体長は体幅の1.8倍以下である。腹部2・3節の基部は後基節に沿って強くくぼんでいない。

9(10) 上翅はよく膨隆し、基部1/3近くで最も幅広い……………*niponensis* BRINCK

10(9) 上翅はやや膨隆し、中央部で最も幅広い……………*curtus* MOTSCHULSKY

……………*curtus* MOTSCHULSKY

4. *G.(G.)japonicus* SHARP, 1873 ミズスマシ

“兵庫，長崎”を原産地として記載された日本で最も普通のミズスマシで、各種の水域に生息している。台湾からの記録もあるが、最近かなりの台湾産水生甲虫類の

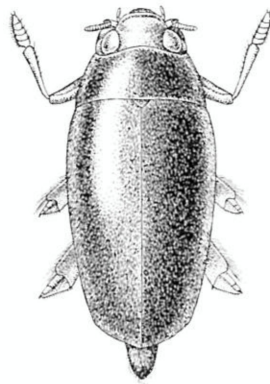
標本を検しているにもかかわらず、筆者は本種を検する機会をもたない。この分布については検討の余地があるようである。

体長：6.0—7.5mm.

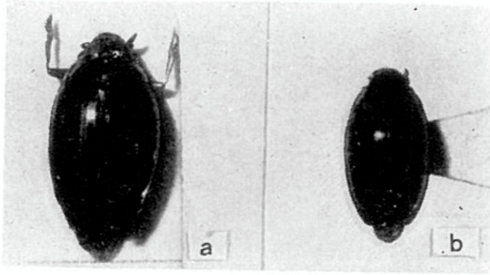
分布：日本（北海道，本州，四国，九州），朝鮮。

5. *G.(G.)reticulatus* BRINCK, 1940 ミヤマミズスマシ

岩手県の“岩手山”を原産地として記載されて以降あまり記録がない。しかし、中部から東北地方の



第9図 オナガミズスマシ (上野, 1973による)



第10図 a. ミヤマミズスマシ
b. リュウキュウヒメミズスマシ

山岳地帯に産するものほとんどはこの種と考えてよいようである。北海道からは従来記録がなかったが、札幌、チメケップ、標茶など筆者が検することのできたミズスマシはほとんどこの種に同定できるところから、これまでの北海道での *G. japonicus* や *G. curtus* の記録は再検討を要するものようである。樺太から記載された *G. sachalinensis* KAMIYA, 1936 (カラフトミズスマシ) はこの種によく似ており、体長がやや大きいことを除いてほとんど同じような特徴であるので、両者の関係を検討する必要がある。なお、後者のタイプ標本は残念ながら第2次世界大戦で焼失している。

体長：5.6~6.0mm.

分布：日本(本州[中部以北の山岳地帯]、北海道)。

6. *G. (G.) gestroi* RÉGIMBART, 1883 ヒメミズスマシ

本州で最も小さなミズスマシで、止水域を主体として生息しているがあまり多くない。原記載には“日本”とだけで詳しい原産地は示されていない。なお、従来の琉球列島での本種の記録は、*G. ryukyuensis* であり、台湾のものは *G. convexiusculus* MACLEAY, 1871 と考えられる。

体長：4.6~5.2mm.

分布：日本(本州、四国、九州)。

7. *G. (G.) ryukyuensis* M. SATO, 1971 リュウキュウヒメミズスマシ(新称)

かつて *G. gestroi* に含めて考えられていた種であるが、新種らしいことはすでに OCHS (1949) によって注意されていたし、Dr. P. BRINCK や上野俊一博士が気付かれていたことを筆者(1962)は報告したことがある。しかし、約10年経過しても誰も記載しないし、種名を確定する必要もあって、筆者(1971)が記載した次第である。原産地は西表島の“ミタラ”であるが、徳之島以南の島々の池に生息している。

体長：4.1~5.0mm.

分布：琉球列島(徳之島以南)。

8. *G. (G.) curtus* MOTSCHULSKY, 1866 コミズスマシ

日本で最初に記載されたミズスマシであるが原産地は明記されていない。各地の水田、池、小川などに普通の種である。体下面全体赤褐色の個体を *var. fulvescens* TAKIZAWA, 1931 というが、未熟個体と考えられる。

体長：4.9~5.6mm.

分布：千島、樺太、日本(北海道、本州、四国、九州)。

9. *G. (G.) niponensis* BRINCK, 1941 ニッポンミズスマシ(新称)

東京の小松公使により送付された7頭の標本によって新種として記載されたが、その後何処からも記録がないだけでなく、この種自体日本では文献に引用されたこともないようで、まったく知られていない種といってよい。原記載には産地の記述がないので、あたかも東京が原産地のように考えられる。実際には、Dr. P. BRINCK からの私信によれば、原産地は九州の“Kokubu (国府)”で1940年3月29日 S. KOMATSU 採集によるものである。*G. curtus* との差は非常に微妙で、あまり判然としない。多くの個体での検討が必要であるが、稀な種のように、宮本正一博士のご好意による九州産(Funyudō 不入道)の1♂を検することができただけである。

体長：4.6~5.5mm.

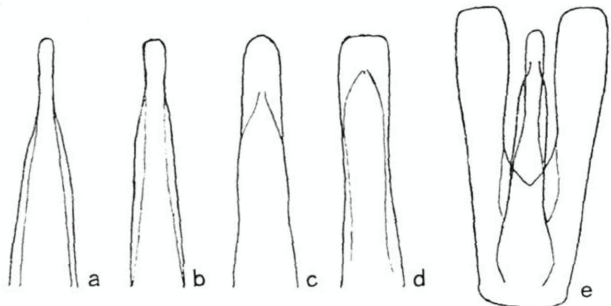
分布：日本(九州)。

Subfamily Orectochilinae オナガミズスマシ亜科

最も多くの種を含み、中型の種が主体の亜科であるが、僅か3属が知られているにすぎない。そのうち、*Orectochilus* 属のみが日本に分布し、他の *Orectogyrus* 属は約140種がエチオピア区だけに分布しており、*Gyretes* 属は約70種が南・北アメリカに分布している。

Genus *Orectochilus* ESCHSCHOLTZ, 1833 オナガミズスマシ属

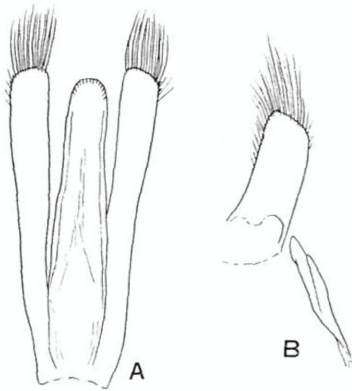
この属は約200種からなり、2亜属に分けられるが、その分布は旧北区から東洋区にかけてであり、



第11図 ミズスマシ属の♂交尾器

- a. ミヤマミズスマシ b. コミズスマシ c. ヒメミズスマシ
d. ミズスマシ e. ニッポンミズスマシ

(a~d: BRINCK, 1940. e: BRINCK, 1941 による)



第12図 リュウキュウヒメミズスマシの交尾器 A: ♂ B: ♀

1種だけがアフリカのコンゴから記録されている。本属の大多数は東洋区に分布圏をもつ *Patrus* 亜属に含まれるが、日本産種は前胸背および上翅全体が微毛に覆われていることにより前記亜属と区別できる *Orectochilus* s. str. 亜属に含まれる。この亜属は約15種が旧北区に分布し、4種だけがインドからビルマにかけて分布を拡げている。

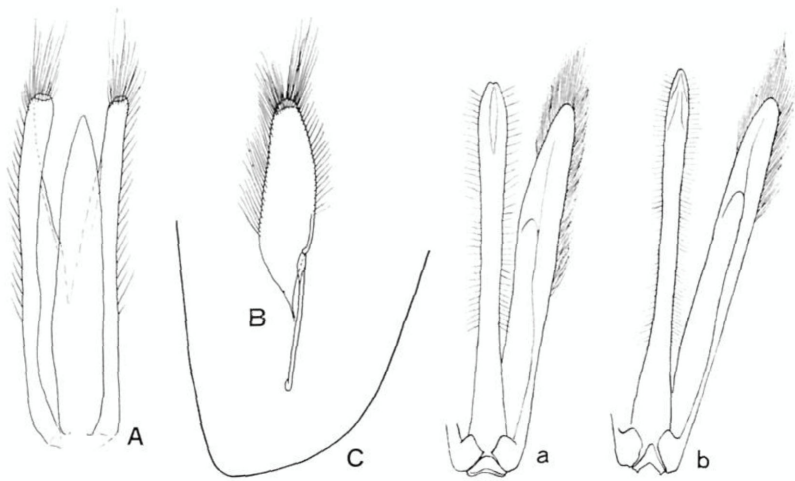
日本からは、つぎの検索に示した6種が知られているが、他に2種の記録がある。これらの種については、日本に産することが否定的であるので、その事情について解説しておきたい。ZAITZEV (1910) は、V. PLIGINSKI が1909年8月20日神戸で得たとする標本に基づいて、*O. corniger* と *O. nipponensis* の2種を記載した。その後、OCHS (1930, 1931) は Annam, Song-Dinh, 25-26. vii. 1909 (PLIGINSKI) とラベルされた標本を検した結果、*O. corniger* と同定できるとし、それは模式標本の1つに相違ないとしている。併せて、Leningrad 博物館の副模式標本をも検し、この種を日本産としたのはラベルを誤ったに違いないとしている。それを裏付けるかのように、明らかに日本に産しない東南アジア産ミズスマシ2種に同じ誤ったラベルが付されていることやこの種がジャワ、ボルネオ、スマトラ、ヴェトナムなどから得られていることをあげている。さらに、*O. nipponensis* も同じ事情で日本産でないとし、この種は *O. oblongiusculus* RÉGIM-

BART, 1886 の地方型あるいは *O. tonkinensis* RÉGIMBART 1891 と同じものでないかとしている。なお、神谷 (1933) がこの種を *O. corniger* と同じものであるとした解釈は明らかに誤りである。これら両種はいずれも、*Patrus* 亜属に含まれる種で、現在までの知識からは将来も日本で発見される見通しはほとんどないと考えられるので、日本のファウナからは除外すべきである。

- 1(6) 上翅の先端部は円く湾曲し、外縁もほぼ円まる。体長はほぼ 6mm 以下。
- 2(5) 背面は褐色を帯びた黒色で、体下面は褐色ないし暗褐色を呈する。体長は 5.5mm 以上。
- 3(4) 頭部の前半はしわ状に点刻が密布されている…… *villosus* (MÜLLER)
- 4(3) 頭部の前半のしわ状は弱くて細かく、小点刻をやや密に装う…… *punctipennis* SHARP
- 5(2) 背面は黒色、体下面は黒褐色ないし黒色。体長は 5mm 以下…… *yayeyamensis* M. SATO
- 6(1) 上翅の先端は截断状で、外縁は角ばる。体長はほぼ 6mm 以上。
- 7(10) 上翅は外縁に沿って黄褐色を呈し、翅端会合部は強く突出しない。
- 8(9) 上翅会合部の先端は、翅端截断部より内側となる…… *agilis* SHARP
- 9(8) 上翅会合部の先端は、翅端截断部より後方に突出する…… *teranishii* KAMIYA
- 10(7) 上翅は一樣に黒色、翅端会合部は強く突出し、特に♀で著しい…… *regimbarti* SHARP

10. *O. (O.) villosus* (MÜLLER, 1776) エゾコオナガミズスマシ

この種は、ヨーロッパ原産で属の模式種でもあり、シベリアを経て北海道まで広く分布している。それ



第13図 ヤヤマコオナガミズスマシ A: ♂交尾器 B: ♀交尾器 C: 翅端

第14図 オナガミズスマシの♂交尾器 a. 原名亜種 (高知県産) b. 紀伊半島亜種

が、本州に入って *O. punctipennis* に分化したようであり、もしかすると両者は単なる亜種関係かも知れない。しかし、私の手元には北の資料が少なく、残念ながら北海道の本種を検査することができなかった。また、古くから知られているうえに分布が広いので *modeeri* MARSH, *dauricus* MOTSCHULSKY, *sibiricus* MOTSCHULSKY, *invovens* SEIDLITZ, *seidlitzii* JACOBSON など多くの synonym がある。

体長: 5.5~6.0mm.

分布: ヨーロッパ, アルジェリア, エジプト, シリア, コーカサス, キプロス, シベリア, 日本(北海道).

11. *O. (O.) punctipennis* SHARP, 1884
コオナガミズスマシ

“巨椋池, 東京”を原産地として記載されたように、かつては都市近郊の清流や清澄な池で得られていたようであり、筆者の手元にも今では市街の中心に近い名古屋市昭和区山崎川で1942年に穂積俊文氏が採集された標本がある。近年の水質汚濁によってかなり分布が狭められたようで、非常に少なくなった。神谷(1936)は *O. formosanus* TAKIZAWA, 1931 (タイワンオナガミズスマシ) と区別できないとしているが、それとは明らかに別種であるので、従来台湾からの本種の記録は除外されるべきである。

体長: 5.5~6.2mm.

分布: 日本(本州, 四国, 九州).

12. *O. (O.) yayeyamensis* M. SATÔ, 1971
ヤエヤマコオナガミズスマシ

日本のオナガミズスマシ属としては、最も小型な種で、八重山群島で前記の種群から島嶼型に分化したものであろう。これらのコオナガミズスマシ群は、以下に述べるオナガミズスマシ群とはかなり異なった一群であることが、♂交尾器中央片に細毛を有しないことからうかがえる。この種は、西表島の“浦内川”を原産地として記載され、同島河川の上流部で局所的ではあるが群をなして游泳しているのに、石垣島ではそんなに多くない。

体長: 4.1~4.8mm.

分布: 琉球列島(石垣島, 西表島).

13. *O. (O.) agilis* SHARP, 1884 ツマキレオナガミズスマシ

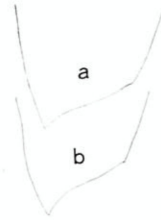
原産地は九州の“熊本”であるが、本州からも得られている。この仲間としては、少ないものようで、筆者は九州産の2♀を検したにすぎなく、本州では水質汚濁の進展によってほとんど採れなくなってしまっているのではないかと考えられる。

体長: 6.0~7.2mm.

分布: 日本(本州, 九州).

14. *O. (O.) teranishii* KAMIYA, 1933 テラニシオナガミズスマシ

“東京近郊玉川”を原産地として記載されてから、ほとんど確実な記録がない。そのうえ、第2次世界大戦によって模式標本は焼失してしまっており、原産地付近は環境がまったく変わってしまっていること



第15図 オナガミズスマシ♀の翅端

- a. 原名亜種(愛知県産)
b. 紀伊半島亜種



第16図 ヤエヤマコオナガミズスマシ

などで、この種についての知見を追加することはかなりむづかしくなっているといえる。筆者自身現在までこの種の標本を検したことがない。

体長: 7.0~7.5mm.

分布: 日本(本州).

15. *O. (O.) regimbarti* SHARP, 1884 オナガミズスマシ

この仲間としては最普通種で、現在でも山間の清流でかなり得られる。しかし、この仲間の常として夜行性であるため、昼間は岩かげなどに隠れていて見つけにくい。原産地は“中禅寺”である。

なお、紀伊半島に産するものは、翅端の突起が著しく(とくに♀)、♂交尾器中央片先端が細いことなどによって subsp. *odaiensis* KAMIYA, 1933 (ヤマトオナガミズスマシ) として区別できる。この亜種の原産地は“大台ヶ原入ノ波”で、模式標本は第2次世界大戦で焼失してしまっていたが、副模式標本は現在上野俊一博士の手許に保管されている。また、この亜種についての詳しいことは上野(1954)が報告している。中根(1963)の *ohdaisanus* は綴りの誤りである。

体長: 8.7~10.2mm.

分布: 日本(本州, 四国, 九州).

後記 これまで、3回に分けて続けた日本産ミズスマシに関する解説を終ることになるが、この間国外へ出たりして忙しくもあって、最初の意気込みとは裏腹に原図の作成や十分な解説をする時間がなく、かなり、粗雑なものとなってしまったことをお許し願いたい。なお、数ヶ所明らかな誤植もあるが、たいした問題とならないので、付図説明の誤りだけを正しておきたい。

第1図b *Porrhorrhyncus marginatus* CASTELNAU

第6図 オオミズスマシ

第7図 オキナワオオミズスマシ

末筆ではあるが、標本をご恵与下さった諸氏、オナガミズスマシの原図をお貸し下さった上野俊一博士、一部の原図を画いて下さった堀 義宏、山田晴昭両氏などに厚くお礼申し上げます。

(名古屋女子大学)

屋久島のサトウオビハナノミの記録訂正

およびその近縁種の存在について

高 桑 正 敏

筆者は1969年の甲虫ニュース No. 6, p. 1に「屋久島でオビハナノミ類5種を採集」と題してサトウオビハナノミ *Glipa formosana* Pic を記録したが、これは台湾オビハナノミ *G. pici* ERMISCH の誤りであったので、ここに訂正するとともに浅学を深くお詫びしたい。おそらく屋久島では、まだサトウオビハナノミは採集されていないと思われる(岡留恒丸, 1973, 屋久島の昆虫相, p. 134 の屋久島からの記録は、筆者の上記の誤りに基くものである)。

台湾オビハナノミとサトウオビハナノミとは、前者の方が尾節板は太短いことと、多くは上翅端に白色毛を持っていること、上翅基部 1/3~1/4 あたりの側縁部よりに棒状の白紋を持つことなどで容易に区別できる。しかし、サトウオビハナノミに関しては分類学的にまだ未整理の状態なので、この点についてついでに紹介しておく。この際、和名を使用すると紛わしいので省略する。

G. formosana を1911年に Pic が台湾から記載した時に、2種が混じていたことを ERMISCH が気づき、1940年にもう一方の種を *G. pici* と命名した。その後1950年に、同じく台湾から *G. satoi* NAKANE et NOMURA が記載されたが、ERMISCH の指摘に従い、記載と同じ年に中根猛彦博士みずからこれを *formosana* のシノニムとした。1959年には中条道夫博士により沖縄本島から *satoi* が記録され、続いて1963年には大岡鑑の中で野村鎮氏により奄美大島から *formosana* が記録され、1966年には野村氏によって前述の沖縄本島の *satoi* が *formosana* に入れられた。ところがさらにややこしいことには、筆者と畑山武一郎氏とでこの仲間を検討したところ、*formosana* と *satoi* とは♂ゲニタリア、斑紋の出方、尾節板の微毛の違いなどにより、たがいに別種であろうことが判明した。参考までに、今現在私の手許にある両種の標本のデータを記しておく。

a. *G. formosana* Pic

奄美大島(八津野:1♀, 29-30. vi. 1968, 酒井香採集;1♂, 26. vi. 1970, 水沼哲郎採集;高田山:1♀, 29. vi. 1969, 入江平吉採集;1♀, 26. vi. 1970, 入江採集), 台湾(日月潭:1♂ 2♀, 14. v. 1975, 秋山黄洋採集;1♂, 21. v. 1976, 久保田正秀採集;1♂, 10. vi. 1976, 松本俊信採集)。

b. *G. satoi* NAKANE et NOMURA

奄美大島(Kamiya:1♂, 17. vi. 1969, 入江採集;湯湾岳:1♀, 24. vii. 1974, 久保田採集;西仲間:2♀, 13. vi. 1975, 深町宗通採集), 台湾(日月潭:1♀, 10. vi. 1976. 久保田採集)。

ところが驚くべきことに、上記2種と同一のグループに属すると考えられる標本がなお4種もあり、

このうち2種が奄美大島、残り2種が台湾に分布する。大陸および東南アジアが不明だが、このグループの1種(*satoi*として前述中条博士が沖縄本島から記録したものを)を除けば、残りすべてが奄美大島と台湾のいずれかあるいは双方のみから見つかり、八重山諸島が全種とも空白なことは非常な興味をそそられる。これら6種はたがいに一見よく似ており、参考のために筆者と畑山氏とで作成した検索表を次に記しておく。最後の()内は作成した時(1974年)に使用した標本数を示してあり、これら標本は野村鎮氏、畑山氏ならびに筆者の3人が所有していたものである。

1. 尾節板の幅と長さの比は2.0以下…………… 2
— 尾節板の幅と長さの比は2.4以上…………… 3
2. 上翅の長さは5mm以下;中脛節は黄褐色;尾節板の幅と長さの比は1.6…sp(1)[台湾](2頭)
— 上翅の長さは5mm以上;中脛節は褐色;尾節板の幅と長さの比は1.9—2.0……………
……………sp.(2)[奄美大島](4頭)
3. 触角末端節は非常に細長く、長さは幅の3倍以上……………sp.(3)[台湾](1♀)
— 触角末端節はいくぶん太短く、長さは幅の2.5倍以下…………… 4
4. 上翅肩部から会合部へ向う斜帯は2本;前胸背基半に3大黒紋を並列しない…………… 5
— 上翅肩部から会合部へ向う斜帯は1本;前胸背基半に3大黒紋を並列する……………
……………*formosana* [奄美大島, 台湾](13頭)
5. 上翅後方の帯は会合部に沿って中央の帯とつながる……………sp.(4)[奄美大島](2♂)
— 上翅後方の帯は会合部に沿って中央の帯とつながることはない……………
… *satoi* [奄美大島, 沖縄本島?, 台湾](8頭)

以上のうち、sp.(1)とsp.(2)は斑紋の出方がよく似ており、たがいに代置種関係にあると思われる。また、sp.(3)とsp.(4)に関してはそれぞれ♀, ♂の片方づつの性しか見ていないが、たがいに上翅基部の斑紋がまったく異なるために、別種関係であろうことは明らかである。

これらは近く筆者がまとめて記載・整理する予定であるが、*formosana* の記載後にその変種がいくつか書かれており、それが上記の sp. に当てはまる可能性もあって、きわめて難しい。

末尾ながら、*G. satoi* のタイプはじめ多くの標本を貸して下さった野村鎮氏、共に検討してくれた畑山武一郎氏、さらに標本を下された方々に厚くお礼申しあげる。

(横浜市金沢区)

沖縄本島のタイワンカブトムシについて

北野 龍海

Oryctes rhinoceros (LINNAEUS) タイワンカブトムシは、台湾、中国南部からインド、モーリシャス、セイロン、印度支那、マレー、インドネシア、ポリネシア、ニューギニアと広く東洋熱帯に分布するヤシ類の害虫で朝鮮からも記録がある。国内では南大東島、先島諸島から知られていた。ところが1976年1月地元沖縄の新聞で、沖縄本島摩文仁ヶ丘の戦没者慰霊地のヤシが被害をうけていることが報道され、農林省那覇植物防疫事務所によってこの種であることが明らかにされた。その結果250本のヤシ類中100本程度がこの種によって加害されていることやピロウへの被害が最も著しいなどが確認され、被害樹の焼却などによる防除対策がとられた。このあたりの経緯については梅林、野原(1976)によって報告されている。

筆者は1976年2月11日、食害地の北東に当る摩文仁ヶ丘の一隅で能本一照氏の協力をうけてヤシの葉柄基部樹幹から成虫3♂♂1♀、死体2頭、幼虫5頭を採集することができた。また林長閑博士より腐植物でも生育する可能性があるとの教示を受け、糸満市真栄原金城重則氏に調査を依頼しておいたところ、12月初旬から下旬にかけて堆肥をふるいにかける作業中、成虫および幼虫がかなりの数採集された。

そこで、筆者自身、糸満市真栄平、新垣、真壁の各部落を調査して堆肥中より成虫4♂♂、2♀♀、

蛹1♀、3令幼虫31頭2令幼虫2頭を採集することができた。これらの成虫はすべて現地(パカス)でよばれるサトウキビの絞り粕を畑の隅に積みこんで堆肥としビニルハウスの苗床などに肥料として使われているもので、この場粕は1年目は黄褐色をしているが、2年目は黒色に腐熟し、タイワンカブトムシはすべてこの2年目の堆肥より見つかった。

このことから、タイワンカブトムシの産卵はその年の場粕が堆肥に積みこまれる以前になされること、採集された成虫も他の場所から潜入したものでなく、その堆肥中で羽化したものであることが推定される。(産卵のため堆肥に潜入した♀成虫が、そのままその場で越冬する可能性もなくはないが、採集した成虫では解剖の結果すべて新成虫であることがわかった。)また、採集されたものに卵や1令幼虫がないだけで他の様々なステージがあることから発育にはかなりのバラツキがあることが考えられる。

最近、沖縄本島からはカブトムシの別亜種 *Allo-myryna dichotoma takarai* KUSUI が記載された。(楠井, 1976) そこで沖縄本島にはカブトムシ類が一挙に2種にふえたことになる。

これらの2種のカブトムシは別族(タイワンカブトムシは Oryctini, カブトムシは Dynastini)に属し、比較的縁のとおい種であるが、幼虫は大きさ、形ともに酷似していて、大腿の切歯が4歯まで数えられることなど共通点も多い。これら2種の幼虫(終令)は表のように区別できると思う。

表. タイワンカブトムシとカブトムシの幼虫(終令)の区別点

タイワンカブトムシ	カブトムシ
1. 大腿の第3切歯先端は、第1歯と第4歯を結ぶ線の内側にあり、第2歯とはほぼ同じ高さ、余り突出しない。(E)	1. 大腿の第3切歯の先端は、第1歯と第4歯の先端を結ぶ線より突出する。(F)
2. 触角の第4節末端は普通。(A)	2. 触角の第4節末端腹面は、一見分枝状に下方に強く突出する。(B)
3. 触角第5節の感覚孔は背面、腹面ともに8個~10個で数が多い。(C)	3. 触角第5節の感覚孔は背面、腹面ともに6,7個。(D)
4. 前頭中央の前縁部附近はシワ状で点刻はやや細かく不規則に散在する。	4. 前頭中央の前縁部附近は平滑で点刻は大きく明瞭。
5. 周気門輪(気門のまわりをとりかこむ着色した硬化部)は大きく、腹節最後部のものでは、それを持つ葉片の3分の1以上。	5. 周気門輪は小さく、腹節の最後部のものでは、気門のある葉片の幅の4分の1以下。

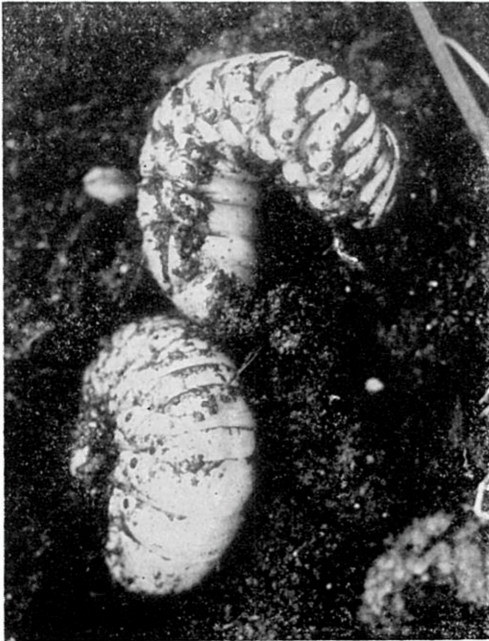


図 A. 堆肥から採集されたタイワンカブトムシ幼虫

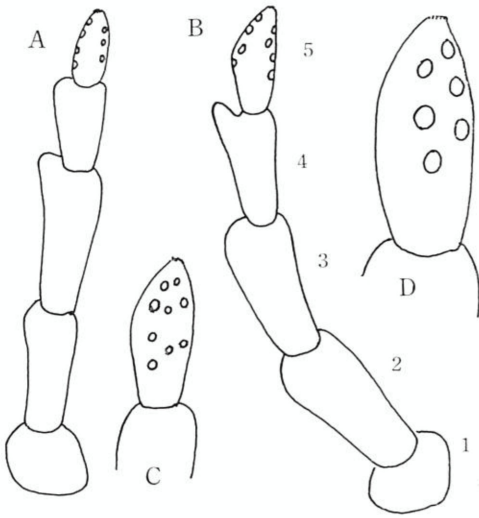


図 B. タイワンカブトムシとカブトムシの各幼虫の触角
A, B: 左触角左側面 C, D: 同, 第5節腹面
A, C: タイワンカブトムシ B, D: カブトムシ

なお、沖縄本島のタイワンカブトムシの侵入経路については、被害植物の移入状態から梅林・野原(1976)は与那国島を挙げているが、成虫の上翅の構造から三宅(1968)が指摘しているように少なくとも南大東島方面からではないと言いうると思う。

本稿を草するにあたり、終始ご指導うけた三宅義一氏に深甚の謝意を表するとともに、タイワンカブトムシの習性についてご教示いただいた林長閑博士、琉球大学の東清二助教授、元琉球林試の国吉清保技師、高知大学の野里和雄助教授ならびに那覇植物防疫事務所の梅林満智也氏、採集にご協力下さった、浦添市の能本一照氏、那覇防衛施設局の金城重則氏とそのご両親金城重雄、トミ氏に深くお礼申しあげる。

参考文献

牧茂市郎, 1914. 台湾に於ける椰子の二大害虫タイワンカブトムシ, ヤシオオゾウムシ, 台湾農事報, 8(86), pp. 31~33, 2 figs.
GRESSITT, L., 1953. The coconut rhinoceros beetle, pp. 1-157, Bishop Museum, Honolulu.
三宅義一, 1968, タイワンカブトムシ南大東島に産す, Pulex, 44, p. 178.
楠井善久, 1976, 沖縄のカブトムシについて, 昆虫学評論, 29, (1 & 2), pp. 51-54, 1 text fig. & pl. 5.
梅林満智也, 野原堅世, 1976, ヤシオオゾウムシ・タイワンカブトムシ沖縄本島に発生, 那覇植物防疫情報, 22, pp. 126-128.

(沖縄県那覇市)

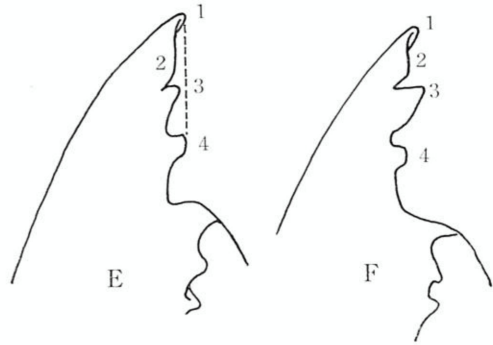


図 C. タイワンカブトムシとカブトムシの各幼虫の左大腮先端部
E: タイワンカブトムシ F: カブトムシ

○新潟県未記録の甲虫類(1)

Tillus igarashii KONO イガラシカッコウムシ

本種は、体長 10mm 内外、黒色で、上翅は淡褐色や暗色を帯びる。

新潟県のカッコウムシ科については、筆者の報告(1975, 1977)により10種が知られているが、本種の発見により新たに1種追加された訳である。

12頭, 西蒲原郡角田山五ヶ峠, 9. vii. 1977, 佐藤・清野・小池採集。

なお、本種は蛾類採集のため佐藤力夫・清野昭夫氏らが設置したナイターの白布に飛来したものである。

末筆ながら、その際そこに集まった甲虫類の採集を快諾された両氏に謝意を表する。

(新発田市, 小池 寛)

○ヨツバコガネ福島県の記録

東京教育大学の大桃定洋氏は、従来より福島県の甲虫相解明のため努力されている。今年夏にいわき市を調査された際にヨツバコガネ *Ohkubous ferriei* NONFRIED, 1895 黒色型を採集されたので報告する。

1頭, 福島県いわき市江田, 6. viii. 1977, 大桃定洋採集。

同行の高桑正敏氏も朽木中より本種の死骸1頭を掘り出したという。

本種は従来、本州、三宅島、御蔵島、小笠原諸島、四国、九州、屋久島、奄美大島、沖縄本島で採集されているが、本州における東限は紀伊半島だったので、これにより本種の東限は一挙に福島県に飛んだことになる。

最後に、貴重な記録を発表する機会を与えられた大桃定洋氏に深謝する。

(横浜市磯子区, 秋山黄洋)



○静岡県磐田市で採集されたオオサカスジコガネ

本種は名前が示す通り大阪を模式産地として1942年に記載されて以来、模式産地以外の産地は九州の佐賀が知られているにすぎなかった。しかし最近では、1973年静岡大学の吉田正義教授等の調査によって、磐田市周辺にも分布していることが確認されている。

筆者等は1977年6月27日に当地においての夜間採集で本種を採集

したが、本種は *Anomala* 属の中にあつては非常に分布の限られた種類であるのでここに報告する。

Anomala osakana SAWADA, 1942 オオサカスジコガネ

7♂♂, 5♀♀, 静岡県磐田市, 27. vi. 1977, 久保田正秀, 斎藤秀生採集。

(東京農大, 久保田正秀, 斎藤秀生)

○石川県におけるサビナカボソタマムシの記録

サビナカボソタマムシ

Coraebus ishiharai Y.

KUROSAWA, 1953 は広島

県道後山産の1♂及び鳥

取県大山産の1♂によつて

記載され、その後福岡

県福智山, 東京都高尾山,

福井県武生市若須岳から

記録があるが非常に少ない

ようである。筆者は三

蔭外茂治氏の御好意によ

り、従来記録のなかった

石川県産の本種を見る機

会を得たので報告する。

1♀, 金沢市天池坂, 5. vii. 1970, 時国健太郎採集。



○アマミアオジョウカイ沖縄本島の記録

アマミアオジョウカイ *Themus kazuoi* N. OHBAYA-

SHI et M. SATO, 1968 は比較的稀な種であり、これまでの産地は奄美大島と徳之島が知られていた。しかし筆者の手許には沖縄本島産の標本があるので報告しておく。

1♀, 沖縄本島与那, 10. iv. 1975, 小倉直樹採集; 1♀, 沖縄本島与那, 22. iv. 1977, 西川直己採集。

なお、筆者の手許にある奄美大島産の標本と外部形態の比較検討を行なった結果、前胸背の斑紋が離れることと、脚が幾分黒化するほかは、たいした差異はみられなかった。

末筆ながら、貴重な標本をご恵与下さった小倉直樹、西川直己両氏にお礼申しあげる。

(横浜市磯子区, 秋山秀雄)

○エゾトゲムネカミキリとオヒョウとの関係

エゾトゲムネカミキリ *Oplosia fennica suvorovi*

PIC のオヒョウ(ニレ科)との係わりは、草間慶一

博士(1973)と衣笠恵士博士・藤田宏氏(1977)に記さ

れている。一方、私の聞き知るかぎりでは、それは

すべて福島県湯の花と松枝岐における例に基くもの

である。しかし、1977年6月14-15日に私が同地を

訪れたところ、湯の花の本種の有名なポイントには

1本のオヒョウも見つからず、オオバボダイジュ

(シナノキ科)のほぼ純林で、本種もその枯枝から10

頭前後見つけた。松枝岐においても同様にオオバ

ボダイジュのみから見つかったし、小林敏男氏はそ

の枯枝から本種を脱出させたという。

一部の人は、南会津のオオバボダイジュをオ

ヒョウと見誤ってきた事実もあり、エゾトゲムネカ

ミキリとオヒョウとの関係は、本種が雑食性らしい

だけに少しも不思議ではないにしろ、再検討の必要

もあろうかと思われる。

(横浜市金沢区, 高桑正敏)

甲虫談話会

会費(1カ年)1500円, 次号は12月中旬発行予定

投稿メ切は11月20日。

発行人 黒沢良彦

発行所 甲虫談話会 東京都台東区上野公園

国立科学博物館動物研究部内

電話(364)2311, 振替 東京 60664

昆虫の器具は「志賀昆虫」へ

日本ではじめてできた有頭昆虫針!!

1, 2, 3, 4, 5号(各号 100本 160円)

なお、無頭針00号もできました。その他、採集・標本整理用各種器具も取揃えてあります。

〒150 東京都渋谷区渋谷1丁目7-6

電話(03)409-6401(ムシは一ばん)

振替 東京 21129

志賀昆虫普及社

タツミの昆虫採集器具

ドイツ型標本箱 木製大 ¥5,000, 桐合板

製インロー型標本箱中 ¥1,400, 送料一箱につき

都内及第一地帯: 3個以下 ¥1,200, 4個以上 ¥850

(以下同様), 第2地帯 ¥1,400, ¥950, 第3地帯

¥1,600, ¥1,050. 其他, 各種器具, 針などを製作

販売しています。カタログを御請求下さい。(¥140)

タツミ製作所

〒113 東京都文京区湯島 2-21-25

電話(03)811-4547, 振替 6-113479